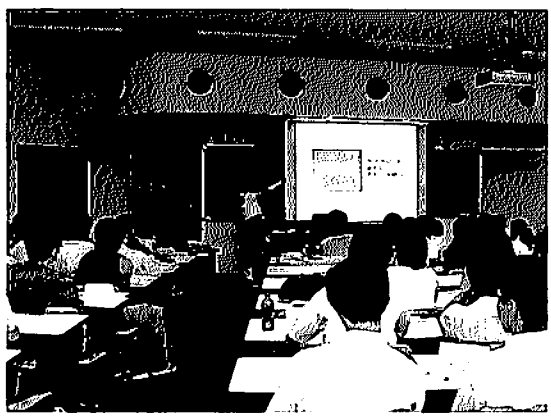
高校生環境フォーラム
～高校生自身の手による自己学習組織の試み～

早稲田大学高等学院　本杉　秀穂

高校生が自らの手で環境問題への学習活動を作り出し、環境問題へ関わる主体として行動し、さらには社会に対して高校生の立場から情報と意見を発信していこうという活動が自律的に立ち上がり、一定の広がりを見せているのが、「高校生環境フォーラム」の試みである。



全体会での発表

1　高校生環境フォーラム成立の経緯

高校生環境フォーラムの出発は、選択科目「環境学入門」の授業であった。

テーマを自主的に設定して、少人数で議論し、さらには、何らかの政策提言を行うところまで持って行こうという、いわば「生徒主体」の授業が高等学院における「環境学入門」である。「地球温暖化」が授業テーマとして選択された後、生徒自ら猛烈に勉強し、IPCC（政府間パネル）の報告書類を読み込み、ベースとなる知識の一覧を作り上げ、プレゼンテーションで仲間と共有した。さらに、そのベースの上に政策提言グループを、国際規模、国家規模、地域規模、企業レベルと環境にかかわる主体の大きさごとに構成し、政策立案を行った。

それぞれのグループでのリサーチが進み、具体的な疑問やカウンタープランの元となるアイディアが生まれてくると、「せっかく作りだしたアイディアやプラン」をどう活かすのかが、鋭い問題となり始める。そこで、この取り組みの成果をどう発表するか、どう社会に伝えていくかが問題となったのである。議論の結果生まれてきたのが、高等学院という一つの高校だけではなく、いくつかの高校の高校生がともに学習成果を披露し合い、そこから生まれてくる政策提言を合意できる範囲で、高校生の集合体から社会に訴えようということであった。

そして、具体的に高校生の自主学習組織であるとともに高校生の意見を社会に発信する場となるような「高校生環境フォーラム」が構想されていくことになる。趣旨を書いた手紙を東京近郊の百数十校に出すことから始め、結果として、早稲田大学高等学院生徒以外に慶應義塾湘南藤沢高等部生徒、立命館慶祥高等学校生徒、立教女学院高等学校生徒等を中心に20校余りの生徒が加わり、2003年３月（90名）、2003年８月（125名）、2004年３月（85名）と３回のフォーラムを実現することとなった。各回ともテーマごとの分科会で議論を行ってきた。最近では、環境系の研究所の職員の方やNPOの活動家の方が、ボランティアで議論に参加している。

現在では、日常的に環境問題の学習と実践の交流を図るべく、小規模の学習会を行う取り組みが始まっている。最初のテーマは「ジェンダーと環境」で、女子生徒がレポーターとなり、女性の目

分科会での討論

から見た環境問題を提起するもので、十数人の参加生徒にとって極めて新鮮な刺激となった。

2　意義と課題

フォーラムに最初は参加者として、次にはスタッフとしてかかわって重要な役割を果たしたある女子生徒の言葉を引用して意義の確認としたい。

「第一回のフォーラムで得た“驚き”は今になっても褪せることはありません。正直、環境問題についてあまり興味も知識もなかった一年前、ひょんなことから参加したフォーラムで私の中に新しい世界が広がった、といっても過言ではないかもしれません。何より大きかったのが、次の二つ。『今自分が生きているこの時代にこの場所で、こんなにもたくさんの問題が起こっている。そのそれぞれに対してこんなにも多様なアプローチがあるのか！』『同世代である高校生が、こんなにも高い意識を持っている！』」（『高校生環境フォーラム報告集』より）

さらに、組織を大人に依存することなく、自らの手で運営していくという難事に挑戦しているという意義もある。このことによって、高校生がたくましくなっていることも、強調しておく。

次に問題点と課題である。第一に、高校生の環境問題に関する交流の場とはなり得ているが、社会への提言や情報発信をどのように具体化するかである。第二に、自主活動組織であるので、当初から水平的な組織を目指し、学校単位よりも個人単位での参加を勧めてきた。こうした組織形態につきものの脆弱性をどう克服するか、である。

3　高校生環境フォーラムの紹介

3回のフォーラムで取り上げられたテーマを紹介する。レポーターも議論参加者もともに高校生であることに注目してご覧いただきたい。

①「新リサイクルシステム構想」②「環境問題なんてない!?」③「京都議定書から見る富士市のゴミ行政」④「緑を守る　ナンキンハゼ　プロジェクト　より」⑤「地球温暖化の原因は本当にCO_2なのか」⑥「教育デザイン」⑦「汚染別自然環境」⑧「コマーシャルメッセージと環境」⑨「法曹と環境」⑩「企業と環境」⑪「CM研究」⑫「発展とは、豊かさとは、『発展途上国から見た環境問題』」⑬「資源の枯渇」⑭「酸性雨と排気ガス～人類の生み出した排気ガスクリーン計画」⑮「禁煙推進　『禁煙コーナー』」⑯「循環型社会に求められる新リサイクルシステムの提案」⑰「ジェンダーと環境」⑱「環境教育の実践」⑲「『環境に優しい』の矛盾」⑳「環境正義とは」

最後に、この活動を資金面で支え、また、報告書として世に問う機会を与えてくれた浦野環境教育奨励金に感謝の意を表したい。